報告

看護系大学基礎看護学領域で遠隔授業に取り組んだ教員の体験
−新型コロナウィルスによる緊急事態宣言下での教育方法の転換−

Experience of teachers who worked on distance learning in basic nursing at nursing universities
-Changing the way of education under the declaration of a state of emergency due to Covit-19 -

屋宜譜美子[1]　蔵谷範子[1]

抄録:
【目的】令和 2 年度の前期、基礎看護学看護技術教育科目を担当する教員が遠隔授業に取り組んだ経験から得られた教育的意味、困難を明らかにすることである。
【方法】機縁法で 17 大学 17 名を対象にした半構成的面接の逐語記録を分析データとした。所属大学の IT 環境、遠隔教育の推進体制は内容分析を行い、遠隔教育体験についてのインタビュー内容をテキストマイニングで分析した。
【結果】「単語頻度分析」「名詞−動詞・サ変接続名詞係り受け分析」「ことばネットワーク分析」で、「学生」「教員」「授業・演習・遠隔授業」に共起関係が集中し、この 3 つの単語群で「注目語分析」を行った。
【結論】教員は遠隔教育体験から『学生目線』の講義、演習運営上の問いを見出していた。感染予防を考慮した演習は行うべきだが教員の疲弊を伴う実態が垣間見られた。遠隔教育の充実は情報発信システム、学生の受信システム、双方向性を担保したIT環境の整備が前提条件となることが確認された。

キーワード:基礎看護学,遠隔授業,教員,体験,新型コロナウィルス緊急事態宣言
Keywords:basic nursing, distance learning, teacher, experience, state of emergency coronavirus

1. はじめに

平成 13 年文部科学省告示第 51 号(大学設置基準第二十五条第二項の規定に基づく大学が履修させることができる授業等について定める件)(以下、「メディア授業告示」)では高等教育の IT 化について「多様なメディアを高度に利用して、文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的に扱うもので、(略)同時かつ双方向に行われるもの、毎回の授業の実施に当たって、指導補助者が教室等以外の場所において学生等に対面することにより、又は当該授業を行う教員若しくは指導補助者が当該授業の終了後速やかにインターネットその他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うものであって、かつ、当

受付日:2021 年 12 月 6 日　受理日:2022 年 1 月 19 日
1 湘南鎌倉医療大学看護学部
yagi.f@tenriyorozu-u.ac.jp　Fumiko Yagi , Noriko Kuratani

該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されているもの」という条件下で、通学を要する高等教育でも遠隔授業を推進する方向性が示されている[1)]。

文部科学省は令和 2 年 4 月 24 日「新型コロナウィルス感染症対策に関する大学等の対応状況」では、全国で遠隔授業の実施を検討しているのは回答大学 478 校の 59.5％で遠隔授業の実施を決定しており、検討中 39.2％を加えると「ほぼすべて（98.7％）の大学等で実施または検討する方針」としている[2)]。

看護系大学協議会の「新型コロナウィルスの感染拡大にかかる看護系大学への影響および対応に関する調査結果　第 2 弾」[3)]では、講義による授業の変更は 72.6％、演習による授業の変更は 49.8％であった。この調査では、通常授業の「代替案、対応」について自由記述による回答を求めており、既存の e-ラーニングシステムの利用、オンライン授業、オンデマンド授業が代替案として挙げられていた。

中野（2005）らは、全国の看護系大学・短大・専門学校を対象にアンケート調査を実施し、421 校より回答を得(回収率 40.2%)、結果 90.7%の学校が情報科学教育を行い、情報処理教育用設備は 82.9%が有していたが、CAI(Computer Assisted Instruction)を利用している学校は 13.1%、遠隔授業を行っている学校は 4.0%に過ぎないことを示している[4)]。

中野らの研究から、すでに 15 年が経過しているが、看護系大学での遠隔授業経験はまだ浅く、それを担う看護教員は、未経験の遠隔での教育実践に取り組むという経験をしたと予想された。

看護学への導入を担う科目群である基礎看護学領域の科目は、伝統的に講義に続く実習室での演習、グループワークを織り交ぜて行われることが多い。令和 2 年度前期科目としての基礎看護学領域科目を担当する教員は、入学後間もない新入生を対象に IT 教育環境が未整備な状況下で、遠隔教育という新たな教育方法に取り組むという稀有な体験をしたと想定された。

今回、遠隔授業という新たな教育方法に取り組んだことにより、体験を個々の教員がどのように受け止め、どのような工夫や発見をし、どのように困難を解決したかを明らかにすることで、今後ますます進展していくであろう遠隔授業の質の担保に資する基礎的データを提供することを意図して研究に取り組むこととした。

2. 本研究の目的

新型コロナ感染の遷延化が想定される現在、感染予防対策と学習機会の確保の工夫が求められる[5)]中で、基礎看護学教育の新たな教育方法として基礎看護学領域の遠隔教育を進める上の示唆を得ることを目的とする。

令和 2 年度の前期、対面での講義・演習が通例である基礎看護学看護技術教育科目を担当する教員が、新型コロナウィルス感染拡大による緊急事態宣言下で、急遽教育方法を変更し、遠隔授業の取り組みにより得られた教育的意味、困難を明らかにする。

3. 研究の方法及び期間

1）研究の方法

(1）データ収集方法

①リクルート方針

調査対象者は、令和2年前期に基礎看護学領域科目を担当し何らかの遠隔教育を行ったものに限定し、新鮮な経験を令和2年度の

期間に抽出できるよう迅速な対象者リクルートができることを意図して、機縁法によるリクルートを選択した。

看護系大学1大学1名、基礎看護学領域で看護技術を含む科目を担当する教員で、研究協力同意が得られた者とする。

2名の研究者の縁故者から、該当者の紹介を受け、該当者の内諾の下、所属組織責任者の協力同意書を受理した後に、該当者本人からの協力同意を得た。

②テータ収集

Zoomによる60分を目安とした遠隔インタビューを行う。対象者にメール、または電話でZoomによるインタビューの可能な日時を決定した。半構成的インタビューの主な内容は、「対象者の背景」「体験した遠隔教育について」「遠隔教育の体験について」とした。

(2)インタビュー内容のデータ化

Zoomの録音機能で得られた音声ファイルから逐語記録を作成した。

(3)分析の方法

テキストマイニング(Text Mining Studio Ver3.1 数理システム)を用いて分析した。

2)研究期間

研究は、令和2年(2020)11月から開始し、令和3年(2021)11月までの期間。

4.倫理的配慮

本調査の実施にあたっては、本学研究倫理委員会の承認を得た(承認番号005)。

研究者2名の縁故者から該当者の紹介を受け、該当者に協力の内諾とともに所属組織責任者の職名、氏名の紹介を受けた。所属組織責任者宛てに研究説明書及び協力同意書を郵送し返信を受けた後に、該当者本人宛に研究説明書、同意書、同意撤回書を郵送して同意を得た。

インタビューは対象者が指定した日時にZoomで行い、動画ファイルと音声ファイルを作成し、音声ファイルのみを研究者のパソコンにダウンロードした時点で、Zoomサーバー上の動画ファイル・音声ファイルの両方を消去した。

なお、匿名性を保持するために、当該者を紹介した縁故者には当該者の研究協力の諾否を伝達しないこととした。本研究に係るデータおよび資料のすべては、本学事務局長が情報管理者として、本学規定の期間保管管理する。

5.結果

1)対象者の背景および遠隔教育に関する環境整備状況

17大学より研究協力の同意が得られ、17名の当該者の紹介を受け、全員の研究協力の同意が得られた。令和3年1月から2月の間に、2名の研究者が分担して17名の対象者にZoomで40分から60分でインタビューを行った。インタビューで聞き取った項目のうち、対象者の背景及び所属大学のIT環境、遠隔教育ツール、所属大学での遠隔授業推進サポート体制は以下の結果であった。

(1)対象者の背景(表1)

表１　対象者の背景

no	職位	大学での教育年数
1	教授	28
2	教授	18
3	教授	13
4	准教授	5
5	准教授	11
6	准教授	13
7	准教授	11
8	准教授	20
9	准教授	12
10	講師	13
11	講師	2
12	講師	17
13	講師	11
14	講師	7
15	講師	13
16	講師	5
17	助教	6
	平均	12

研究対象者17名は基礎看護学に所属し、なんらかの基礎技術教育を担っていた大学における教育経験年数は2年から28年、平均は12年であり、職位は、教授3名、准教授6名、講師7名、助教1名であった(表1)。

(2)所属大学のIT環境、遠隔教育ツール(表2)

所属大学のIT環境は表2に示すとおりであり、遠隔教育ツールはmanaba、Office365、Google classroom Zoomなどであった(表2)。これらの遠隔教育ツールの内わずかに令和2年度以前に導入されたものがあったが、教員間の情報共有を目的とするものなど明確に遠隔教育を目的としたものではなく、ほとんど令和2年度に導入されたものであった。

オンタイム授業配信に必要なZoomの利用は11件あり、大学予算で教員全体にカメラ、マイクの購入と教員数のZoomアカウント契約を行った大学は1件(No.2)みられ、各専門看護学領域にアカウント契約されたのは2件(No.8,17)、遠隔授業開始時に専用スタジオにサポート担当者が常駐した大学は2件(No.6,16)であった。また、令和2年8月に大々的なWi-Fi環境整備工事が行われた例は1件(No.5)であった。

一方、授業時間数の8割を遠隔とする決定を行った大学で、遠隔授業のサポートがなかった例(No.14)、情報センターからのサポート、授業録画に必要な器材の不足が見られた例(No.3, 6, 7)、学生との双方向のコミュニケーションツールが使用禁止となっていた例(No.7)があり、所属大学のIT環境、遠隔教育ツールの利用状況には大きな差が見られた。

(3)所属大学での遠隔授業推進サポート体制(表3)

急遽、遠隔教育ツールを利用することになった時点で、遠隔授業を推進するサポート体制がどのようであったかの状況を表3に示す。

遠隔授業開始前に、何らかの遠隔授業を経験していた者は17名中1名(No.8)で、他の16名は初めて遠隔授業に取り組んでいた。調査対象者自身が遠隔教育を推進したのは5件(No.2,3,9,15,17)であった。他大学の無料サイトでの自己研修(No.6)などの自助努力をし、事務職員、委員会、IT リテラシーの高い若手教員、他学科教員からのサポートを受け遠隔教育に取り組んでいたことが窺われた。

表2　所属大学のIT環境と遠隔教育ツール

データNO	遠隔授業の設備概要	遠隔授業器材	遠隔教育ツール	IT環境	大学方針・判断	遠隔授業のための支援	予算
1	2020.3には遠隔授業準備　教員全員カメラ内臓マイク付きPCあり	器材：PC（カメラ・マイク付き）	Offece365　zoom ウェビナー				
2	2020.4から整備　IT環境整備20万予算要求（カメラ・マイク購入）教員全員ズームアカウント保有（300人アクセス可能）	器材：カメラ・マイク	Offece365　manaba zoom　学習動画共有プラットフォーム「CLEVAS（クレヴァス）」	Zoomアカウント			IT環境整備予算要求
3	研究室からの配信器材が大学から支給されることはなし	器材支給なし	google classroom meet				
4	学生は全員パソコンかタブレットを保有	器材：学生へのPC貸し出し	Google Meet　Google Classroom　Zoom				
5	PCは事務教務でも貸出、看護学科で所有のパソコンも若干増加　研修室のパソコンはカメラなし　Wi-Fi環境は整っていなかったので8月ぐらいに大々的な工事	器材：PC貸し出し、保有	google classroom zoom	Wi-Fi環境 大々的な工事			
6	オンライン授業をする支援室設置　照明器具なし	器材：照明なし	Offece365　manaba Zoom			オンライン授業支援室設置	
7	対面授業を行うかどうかの大学判断や決定が二転三転　双方向禁止　録画等の機材なし	器材：録画等器材なし	Offece365　Teams	双方向禁止	判断・決定の二転三転		
8	大学側がZoomを使える準備 領域ごと1アカウント契約		Desknet's NEO zoom	Zoom環境整備 領域ごとのアカウント契約			
9	情報処理室は担当者2人		Google　Classroom ZOOM			情報処理室担当2名	
10	情報センターなし		CoursePower　Zoom シスコ会議システム			情報センターなし	
11	情報科目の教員のFD研修		Offece365			情報科目教員によるFD研修	
12	情報センターなし 動画は10分、20分の制限		Offece365	動画制限		情報センターなし	
13	大学が遠隔授業決定		Google Classroom		方針決定		
14	3月に大学方針決定、緊急事態宣言後基本体験授業、学習内容により遠隔、1、2年生科目で2割は対面授業、8割を遠隔 動画2分の制限　大学からのサポート体制なし、相談窓口なし		LMS(manaba)	動画制限	方針決定	大学からのサポート体制なし 相談窓口なし	
15	コロナ委員会で行動指針　大学事務局が教材サイトの利用契約		manaba　ZOOM	教材利用契約	コロナ委員会：行動指針		
16	学長が感染対策会議を組織　4月2週目から全ての授業がオンライン　遠隔授業環境整備に必要な資金はすぐに提供された		Moodle　Zoom		学長：感染対策会議の組織化		遠隔授業環境整備の準備資金提供
17	教室分・実習領域ごとのZoomアカウント契約　動画配信会社と無料利用契約		Zoom　Google Classroom	Zoomアカウント契約 動画配信無料利用契約			

表3　遠隔教育の推進サポート体制

元の並び NO.	推進体制	授業者･教員	推進者	推進者	推進者	推進者	実施内容・推進者の支援内容	研修・FD	備考
1	情報専門の学部　数理学の先生 映像系の先生			数理学の教員	映像系の教員				情報専門学部
2	学生委員会（遠隔授業の通信状況調査） 通信環境整え班の結成・教員マニュアル作り　事務局共同FD	教員	学生委員会	通信環境整え班			学生委員会：遠隔授業の通信状況調査 通信環境整え班：教員マニュアル作り	事務局共同FD	通信環境整え班の結成
3	情報科目担当教員と基礎看護学教員の二人で学生の遠隔授業体制サポート ネットワーク系の委員会の教員 学科ごとの担当者が学生のネット環境調査　１回だけリアルタイム授業、リアルタイムの動画公開について学科の中で全体で勉強会		情報科目担当教員1名	基礎看護学教員1名	ネットワーク系の委員会の教員		学生の遠隔授業体制サポート ネットワーク系の委員会の教員：学科ごとの担当者が学生のネット環境調査、	１回だけリアルタイム授業、リアルタイムの動画公開について学科の中で全体で勉強会	
4	情報の担当者から2、3時間、Teamsの教材作り、リアルタイムの授業の進め方や機能授業の進め方の講習		情報の担当者					2、3時間、Teamsの教材作り、リアルタイムの授業の進め方や機能授業の進め方の講習	
5	4月下旬オンライン授業開始　教員のZoomの操作や活用方法などについての研修、レクチャー4月実施							教員のZoomの操作や活用方法などについての研修、レクチャー4月実施	4月下旬オンライン授業開始
6	基本的に実験以外は全部遠隔の方針 他大学無料「教員のためのZoom講座」受講							他大学無料「教員のためのZoom講座」受講	基本的に実験以外は全部遠隔の方針
7	4月は資料を大学で配布、5月末からTeamsでの授業を開始 学生に遠隔授業（Teamsの扱い）開始前に簡単なガイダンス実施							学生に遠隔授業（Teamsの扱い）開始前に簡単なガイダンス実施	4月は資料を大学で配布、5月末からTeamsでの授業を開始
8	教員が動画を編集　2つの教室をZoomでつないで双方向一斉授業経験あり	教員					動画を編集 2つの教室をZoomでつないで双方向一斉授業（経験あり）		
9	教員がIT環境を整えるのを主導 Zoom・Classroomの使い方を情報処理の担当者を含め全教職員に講義して「IT担当大臣」のようになった	教員がIT環境を整えるのを主導						Zoom・Classroomの使い方を情報処理の担当者を含め全教職員に講義して「IT担当大臣」のようになった	
10	教務課　放射線科、理学療法、臨床工学の教員		教務課職員	放射線科教員	理学療法教員	臨床工学の教員			
11	教員がハンディカムで撮影、動画編集後にStream	教員					教員がハンディカムで撮影、動画編集後にStream		
12	情報専門部門なし　サポートなし ITに詳しい教員の支援教員たちで遠隔授業を進める方針	情報専門部門なし　サポートなし（自助努力）	ITに詳しい教員の支援教員たち				ITに詳しい教員の支援教員たちで遠隔授業を進める方針		
13	教務課　講習会の開催、マニュアル作成、教員個人からの Q & A webにup		教務課					教務課　講習会の開催 マニュアル作成 教員個人からの Q & A webにup	
14	各授業者が方法模索	各授業者							
15	教務委員長である基礎教授が推進		教務委員長である基礎教授						
16	若手のITに強い基礎の教員　教務委員会、学生委員会が学生支援グループを形成　オンライン支援担当（常勤教員2名と非常勤雇用2名）が常時4つのスタジオでオンライン授業室で支援体制		若手のITに強い基礎の教員	教務委員会	学生委員会	オンライン支援担当（常勤教員2名と非常勤雇用2名）	学生支援グループを形成 オンライン支援担当が常時4つのスタジオでオンライン授業室で支援体制		
17	学部長、事務と他学科教員で学生用にマニュアル作成 授業者が看護学科教員マニュアルを作成 教職員が大学のハブ容量の調査	授業者：看護学科教員マニュアルを作成	学部長	事務	他学科教員		学部長、事務と他学科教員：学生用にマニュアル作成 教職員が大学のハブ容量の調査		

2)テキストマイニング分析結果

(1)逐語記録からデータ整理の方法

テキストマイニング（Text Mining Studio Ver3.1）の分析は、研究者1名が過去に利用方法の研修を受講しており、使用方法は服部の書籍を参考とした[6]。分析対象の1セルあたりの文章は、100文字と限定されていることから、逐語記録の長文となっている話し言葉の文脈を損なわないように主語、述語の補填、「これ」「その」などの指示語を名詞に言い換えるなどを行いながら100文字で区切り分析対象とした。

このデータ整理を経て、17名の語りの逐語

録から、「遠隔教育の体験について」語られたデータ（総文字数14741文字、228セル）を分析対象データとして抽出した。

(2)単語頻度分析（表4）

表４　単語頻度分析

単語	品詞	頻度
学生	名詞	128
教員	名詞	105
授業	名詞	49
やる	動詞	48
演習	名詞	36
見る	動詞	27
学生達	名詞	17
考える	名詞	17
ビデオ	名詞	16
思う	動詞	16
自分	名詞	14
遠隔授業	名詞	13
感じ	名詞	13
技術	名詞	13
言う	動詞	13
作る	動詞	13
凄い	形容詞	13
状況	名詞	11
違う	動詞	10

分析対象データのすべての品詞の中から、どのような単語が何回出現しているかを見たもの[7]が表4である。

「学生」（頻度128　＊以下数字のみ記載）、「教員」（105）、「授業」（49）、「やる」（48）、「演習」（36）が上位5つの単語であった。

(3)係り受け頻度分析（表5）

係り受け頻度は、主語と述語、修飾と被修飾の関係、並列の関係を可視化することができる[8]。ここでは、主語となるものの行動に注目して自立した名詞と自立した動詞・サ変接続名詞の係り受けを可視化させた（表5）。

表5 名詞－動詞係り受け分析

係り元単語(名詞)	係り先単語(動詞)	頻度
教員	思う	9
演習	やる	5
学生	言う	5
授業	やる	5
ビデオ	作る	4
学生	いる	4
学生	見る	4
学生	考える	4
自分	考える	4
授業	終わる	4
ビデオ	見せる	3
ビデオ	見る	3
学校	来る	3
学生	送る	3
学生	伝わる+ない	3
学生	練習	3
気	づける	3
教員	やる	3
教員	見る	3
教員	作る	3

この結果、「教員－思う」(9)、「演習－やる」(5)、「学生－言う」(5)、「授業－やる」(5)、「ビデオ－作る」(4)、「学生－いる」「学生－見る」「学生－考える」はそれぞれ頻度が4であった。教員は授業を構成しなおし、ビデオを作り、学生の学習状況を考えて遠隔教育に取り組んでいたことが窺われる。

(4)ことばネットワーク（図1）

ことばネットワークとはことばとことばの関係を前提語－帰結語の方向を矢印で示すグラフとして可視化したものである[9]。単語と単語の共起関係を「行動」を表す「名詞－動詞・サ変接

続名詞」との関係の分析を図1に示す。

共起関係の線が集中している部分が、頻出単語と同様の「学生」「教員」であり、その他の線の起点、終点を概観すると「授業」「演習」「ビデオ」など「遠隔授業」に関わる教員の活動を示していた。

インタビューの語りから得られた単語の関係は、注目単語「学生」、「教員・「授業」・「演習」「遠隔授業」とそれぞれに係る「行動」（動詞・サ変接続名詞の関係を抽出）[10]との共起関係を見出すことができた。

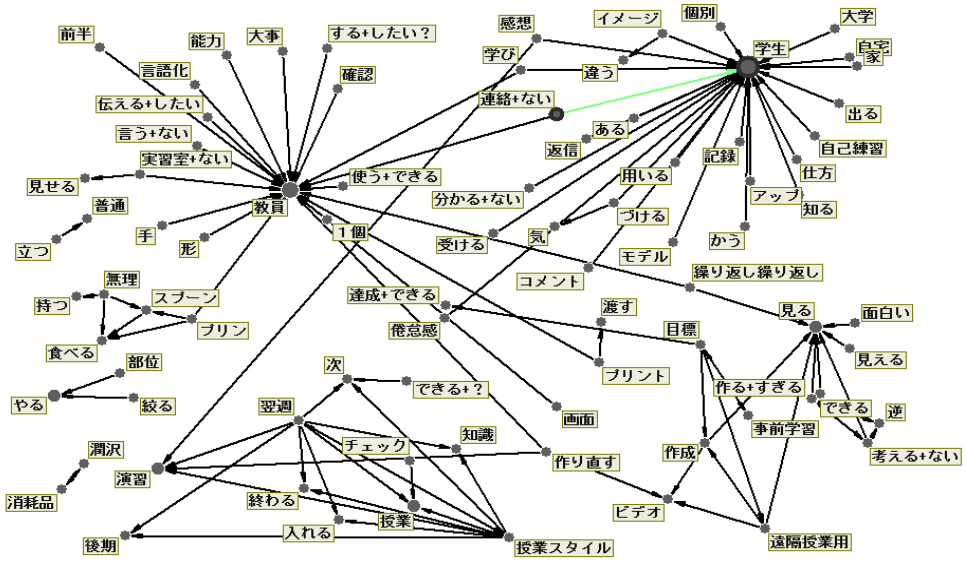

図１　ことばネットワーク（全体）

(5)注目語分析の共起抽出設定

ことばネットワークで見出され、頻出単語でもある「学生」「授業・演習・遠隔授業」「教員」の3つを注目語としてそれぞれの共起抽出設定を行った（図2.3.4、表6.7.8）。

図の矢印の先端が「結論単語」であり、この結論単語に共起する「行動」（動詞・サ変接続名詞）を表す「前提単語」（以後文中《　》）とその《前提単語》を含む原文（語りのデータ）をテキストマイニングの原文抽出機能を用いて行った。

《前提単語》の類似表現からカテゴリ（以後文中【　】で表記）が形成された。

3つの注目語「学生」「教員」「授業・演習・遠隔授業」の《前提単語》の【カテゴリ】の内、共起関係の大きなもの10位までに注目し、原文の文脈を損なわないように作成した要約（以後文中『　』で表記）を表6.7.8に示す。

なお、「学生」の注目語分析の【カテゴリ】は、8位以下はごく少数であったことから8位までの原文の要約を表6として作成している。

原文は一文に多数の単語が含まれており、単語を単位としたテキストマイニング分析では、同一の原文に含まれる複数の単語が、複数の注目語に共起する場合があることが前提となる。

①「学生」を中心とした注目分析（図2,表6）

「学生」を中心とした注目分析のことばネットワークは図2のようであった。この注目語の共

起抽出の結果を表6に示す。

《前提単語》をみると、『毎月1回まとめて』授業資料や振り返りシートを学生に送り、『振り返りシートの返信』を『コースニュース』で全員にフィードバックすることが【あった】、動画を作成し遠隔教育ツールで【アップ】する、学生が理解しにくい【倦怠感】をどのように説明するかの工夫、自宅学習で必要となる血圧計を追加で【買う】ように指示することという教員の活動が表されていた。

学生が【分かる+(または)分からない】状況や対面授業より課題が【出る】ことで学生が大変な状況、大学に来れないことで『自分たちもちゃんとしないと演習もさせてもらえない』と自己学習することが必要だと意識【づける】ことにつながった状況、質問をしてこないと理解度が【分からない】状況をくみ取っていた。

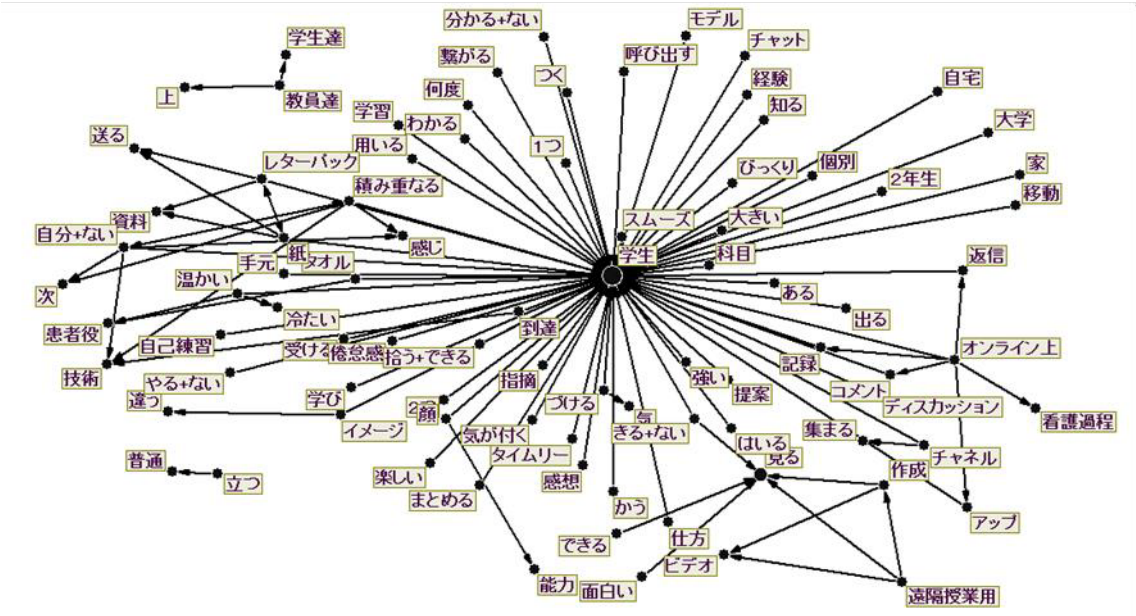

図2　注目語「学生」ことばネットワーク

表6 注目語「学生」に結論付けられる前提単語の原文抽出

【カテゴリ】	前提単語	原文要約
【分かる＋ない】	わからない/分かる	教員に質問してくる学生は毎日のようにここがわからないとか、見てくださいってどんどん持って来たりメールで送ってきたりするので、その学生の状況はわかるが、質問等をしてこなければ、遠隔授業で教員は、学生の状態や反応が分からない。また、これまでの授業では当然分かっているはずの内容について、演習等を制約していることにより、これはわかっていないんだということが、わかる。
【受ける】	受けて/受けてみよう/受けられる等	教員は、演習を分割して、学生の感想とか質問とかを受けていた。教員のコメントでピンと来て、あ、こうすればいいんだとか、これはこのことだったんだって繋がる学生はいいがそうでない学生もいる。 いつもだと技術チェック不合格だった学生には、受かるまで、教員がずっと見るが、今年度は、対面授業で実施できたバイタルサインチェックについては、きっちりチェック受けようと学生に提案した。 遠隔授業に入るにあたって、学生は一切学内に入れなかったので、とにかくスマホでもタブレットでも持ってるもので授業を受けられるようにやってくださいということだった。授業は、学生が受けられる準備ができさえすれば、それほど問題はなかった。
【倦怠感】	倦怠感	倦怠感のある患者さんの寝衣交換について、学生に援助プラン、手順や留意点とかを考えて来る課題を課した。その際、教員は学生に自分がインフルエンザに罹った場合を例に挙げて説明し、倦怠感のある患者をイメージできるようにしたが、本当にぐったりしている状況だったりがうまく伝わっていなかった。学生は、「倦怠感があるというのを分かりました」「こういう状態ですね」とか口でも言うし、レポートでも書いてくるが、教員の実演を見て初めて自分たちのイメージしていたものが違い、倦怠感があるというのはこういうことなんだ、ということに気づき、驚いていた。
【出る】	出る/出て/出して/出した	学生は、全部の科目で全部課題が出るので、課題をするのが大変というのは言っていた。ディスカッションは、学生が一般チャネルから指定のグループチャネルに移動して、各教員のところに参加して顔を出して行う方法だった。 数少ない演習だったが、学生は演習できてよかったという学生もいた。ほんとはもうちょっとやりたかったっていう感想も結構出ていた。
【アップ】	アップ	教員は、画面の中でやってみる、別に動画を撮ってClassroomに上げたりっていうこともして補うようなことはした。学生に資料を先に見てもらい、教員はいつも授業で作っているPowerPointに声を吹き込んだものを作成し、Classroomにアップして事前に見ておくよう指示することで、Zoomでの授業を凄く短時間にする工夫をした。手元がアップした画像を見せると、学生はこれ見たらいいんだと思う。 看護過程の記録は、学生がアップしてきた記録に教員がコメントを書いてオンライン上で返信しているが、学生の記録の出来が悪い。
【ある】	ある/あります/あった/ありました等	学内実習はさせられてないという学校もあると聞いている。授業資料は、前期は毎月1回まとめて個人に郵送していた。学生達から授業が終わると学生達から振り返りシートが送られてくるので、教員は、学生全体に返せばいいものはコースニュースに、こういう質問がありました、こうこうですっていうのを返す。 遠隔授業では、先に知識的な部分が行き、体を動かすその表現することは後ろになるため、タイムラグがある。タイムラグがあるということを踏まえて、教員は、演習でやるべきことを、それも例年以上に会話を入れたり、もう最初から最後まで全部作り直した。教員としては、講義をして、その講義に続いて演習をするというのを繰り返してやっていったほうが、学生には有効かなと、この1年を通して考えて、実際に学生と関わってみて思っている。 講義と演習の間に時間が長いとやりたい気持ちが切れてしまうことがある。 血圧測定など、ビデオを作ってなかった技術に関してはすっかり忘れて参加するので、教員が1から演習時に説明し直したという場面もあった。2年生は、学生同士や教員等と授業や演習などで話していないので、患者を目の前にしたときに喋れるのかなという心配がある。モデルを用いた演習で、患者との位置関係を学生に考えさせるのはできて凄く助かったが、例年とは学びがだいぶ違ったなというのは教員としてあった。 学生にとって自分のものになっていない上に次の技術が積み重なっていった、という感じが教員（私）にはある。 教員が間近でプリンを食べるところを見せたりその動作を説明できたり、学生全員で立ち上がってみたところなど、それはZoomの授業でのメリットでもあったかなと思うし、Zoomの授業も面白かったが、対面での授業のあの学生の姿を見るとやはりみんなで学ぶことは意味があると思っている。 教員が疲弊する状況というのがあった。 学生は、演習で看護師らしいことをやることの喜びはあったと思う。 少人数であればあるほど教育効果はあるといえども、やっぱり教員の負荷と学生の学習到達というところのせめぎ合いとがあると思う。 学生の能力には、理解する能力というのと、不器用さ、器用さという2つの能力があると思っている。
【買う】	買う	学生には、自宅で練習できるように血圧計も買ってもらったが、学生に年度の途中で追加で買ってもらうのも結構厳しかった。
【づける】	気づけた/気づいた/気づく/気が付く/意識づける等	学校に来たい、学校で演習したいって思いが強い学生が多いので、自分達もちゃんとしないと演習もさせてもらえないんだっていうところの意識付けに繋がったと思う。 学生達は、自分がやるだけじゃなくてやられる立場になったときに気づくことが凄くある。そうやって患者役になって気づくこと、実施してみて分かることがかなり変わってしまっていた。 授業での発問に対して、学生が考えてるのか考えてないのか分かんないと思ってたが、考えてくれてたんだ、ただ、手を挙げるにはちょっとハードルが上がってたんだ,学生達が綿毛布を使うのはここで初めてなんだ,学生がイメージしていたもの違ったんだ、などに気づけた。 もう少し学生目線に下ろして考えないといけない、授業方法の工夫について、学生がこういう状況だったら応答しやすいんだ、などに気づけた。 対面授業をやってるときには気が付くと、すぐここはこう考えるのよとか、学生からも質問がどんどん来るが、オンラインでの授業になってしまうと細かいところの指導が行き届かない。

②「授業・演習・遠隔授業」を中心とした注目分析（図3,表7）

「授業・演習・遠隔授業」を中心とした注目分析のことばネットワークは図3のようであった。この注目語の共起抽出の結果を表7に示す。

ことばネットワーク（図3）では、「授業」と「演習」に共起が集中していた。

《前提単語》の【90分】では、前年にかかわりがあった【2年生】とは異なり、入学直後の一年生に『資料も渡せない』中で『いきなりZoomで90分やるのは学生の負担が大きい』状況があり、【チェック】には、技術の練習の前提となる『チェックリストを作っているが（略）練習を見てるとチェックリストを用いてやる学生は一握り』で、対面授業であれば『技術チェック不合格だった学生を補講で（略）受かるようになるまで、教員がずっと見る』が技術試験はできず、『いつもの授業スタイルだと無菌操作をやって、チェックやテストをして、その課題がクリアした上で導尿の演習を重ねていくというのができるが、遠隔授業ではその積み重ねができなかった』と、遠隔教育と、感染予防を配慮して少人数に分割した演習で、技術項目を絞らざるを得ない技術教育の限界が表れていた。

教員たちは、時間を【割】いて『洗練されたものだけに絞る』検討を重ね、不安ながら【音声】を入れるなどの工夫をこらして遠隔教育に取り組んでいた。

遠隔授業を受け、制約を受けながら教育を受けた学生は、『演習で教員が学生に指摘するところは少なく、学生も頑張っている』姿が垣間見られ、『数少ない演習であったが、学生は演習できてよかったっていう（略）、ほんとはもうちょっとやりたかったという』【感想】が結構あった。

こうした遠隔教育の経験から、【考える+ない】というカテゴリには、今後の授業運営の方法について確認や改善の方策が表現されていた。

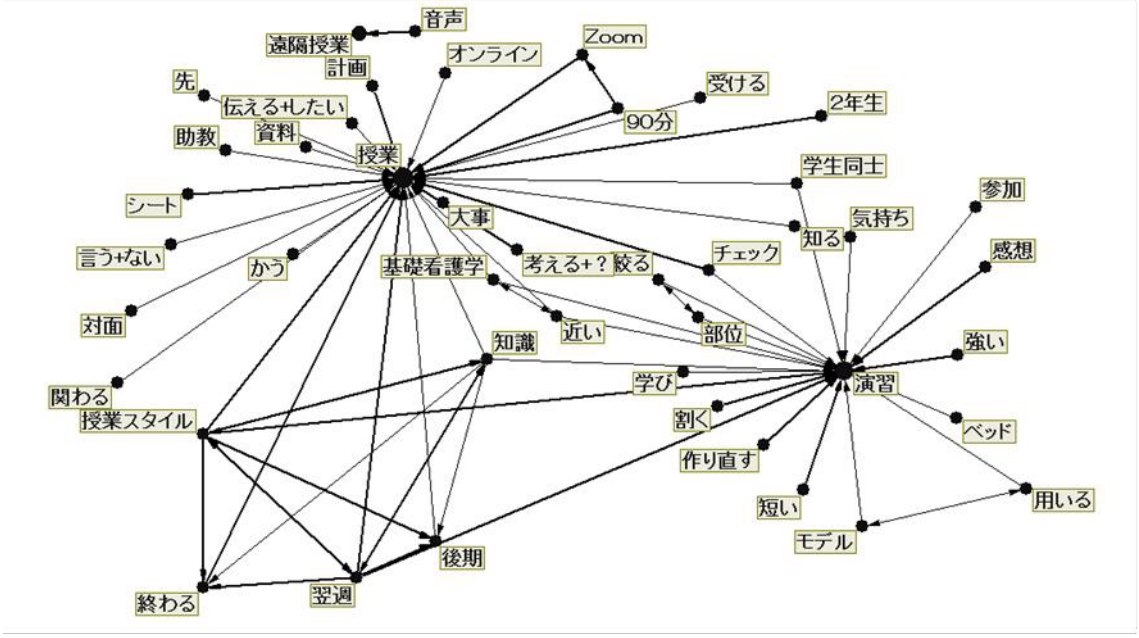

図 3　注目語「授業・演習・遠隔授業」ことばネットワーク

表7 注目語「授業・演習・遠隔授業」に結論付けられる前提単語の原文抽出

【カテゴリ】	前提単語	原文要約
【チェック】	チェック	授業では、健康調査票、2週間の体温や症状をチェックするシート、あと行動歴を演習の前に教員がチェックするしている。 技術の練習においては、一つ一つ学生が学習ができやすいようにチェックリストも作っているが、練習見てると、チェックリスト用いてやる学生は一握りである。 技術に関して、いつもだと、技術チェック不合格だった学生を補講とかいう形で受かるようになるまで、教員がずっと見る。今年は、バイタルサインチェックなど、対面授業で実施できた部分に関してはきっちりチェック受けようと学生に提案もする。 いつもの授業のスタイルだと、無菌操作をやって、チェックやテストをして、その課題がクリアした上で導尿を重ねていくというのができるが、遠隔授業ではその積み重ねができなかった。
【2年生】	2年	遠隔授業は、2年生の技術科目の授業からスタートしたが、学生の状態は去年1年間関わり知っていたので、2年生の授業はそんなに大変ではなかった。 2年生は、学生同士や教員等と授業や演習などで話していないので、患者と喋れるのかな、っていう心配は教員としてはある。
【90分】	90分	最初は学生のIT環境が整ってない状態だったので、いきなりZoomで90分の授業をやるのは学生の負担が大きかった。 いきなりZoomで90分の授業をやるにも授業資料も渡せないという問題もあった。
【音声】	音声	教員として初めての遠隔授業だったので、音声を入れるっていうところの不安もあった。 今年度の工夫を継続しつつ、カメラで顔見せておく、所々では音声も流すといった努力や工夫も取り入れ、学生との距離が近づくような工夫をしてもいいかなと思う。
【割く】	割く	演習で教員が学生に指摘するところは少なく、学生も頑張ってるんだなと思ったが、ビデオを作るっていうところでは教員の時間をかなり割いている。 演習を短く、洗練させたものだけに絞って、やるべきものに時間を割いていくという工夫もした。
【感想】	感想	教員は、演習を分割して、学生の感想とか質問とかを受けていた。数少ない演習だったが、学生は演習できてよかったっていう学生もいたし、ほんとはもうちょっとやりたかったという感想も結構出た。
【強い】	強い	学生が学校に来たい、学校で演習したいって思いが強い学生が多いので、ちゃんとしないと演習もさせてもらえないんだっていうところの意識付けには繋がったと思う。 モデルを用いての演習では、強くやり過ぎると入歯がダーンて落ちてくるので、学生の工夫も入歯が落ちてこないような工夫とかにどんどんなっていってしまう。
【計画】	計画	グループに教員の担当をつけて援助計画を立てたりとか修正したりっていう形でやったりした。今最後の実習に行くために看護過程の分析、アセスメントしたり関連図を書いたり、計画を立てたりっていう大詰めをオンラインで授業をやっている。 助教の教員達は今まで上の教員がされる授業、計画される演習に参加し、グループの学生達にアドバイスすればいいと、思っていた部分があったかもしれない。
【考える＋？】	考える/考えて/考えさせる/考えない/考えなくなる/考えるようになる/考えていない等	教員は、何でこれをするのかという、外せない部分は授業でしっかりと学生に話すが、学生たちがこれまでやってきたことを使いながら自分で考えられるところはあえて言わずにしていたものが、今年に限ってはちょっと、自分の頭で考えるというところが難しい。 これまで授業で教員が発問しても学生からは手挙げなく、考えてるのか考えてないのか分からないと思ってた部分は、考えてくれてたんだ、ただ、手を挙げるにはちょっとハードルが上がってたんだなと気づけた。 知識の授業終わるとその次の日とか次の翌週に演習を入れるっていうふうな、今までの授業スタイルの方が学生は学びがしっかりできてるかなっていうふうに教員としては考えた。 モデルを用いた演習で、そのときに患者さんとの位置関係どういうふうにしたらいいのかなとかを学生に考えさせるのはできたので凄く助かったが、ただ、例年とは学びがだいぶ違ったなっていうのは教員としてあった。 反転授業になるので、知らないままで視覚で見て授業で理論のところを構築して、それでどうするかってことを教員は考えた。 教員として、もう少し学生目線に下ろして考えないといけないということが気づけた。 1つ懸念することは、学生は遠隔授業用に工夫して作成したビデオを見ながら動けるが、ビデオをあまりにも作り過ぎてしまうと、今度は逆に学生が考えなくなってしまう。遠隔授業用に事前学習や作成されたビデオを繰り返し見るということをやることで、目標は一見達成できるけれども、学生が自分で考える力がなくなってしまうんじゃないか。 これまで学生が自分の頭で考えるという思考については目立ってこなかった。 対面授業をやってるときには気が付くと、すぐここはこう考えるのよとかできるが、オンラインでの授業では細かいところの指導が行き届かない。 授業の工夫としては、事前課題は結構自分で考えるようにしていた。 助教の教員達は（演習として行うべき活動は何なのかということを）あまり考えてないというか、今まで上の教員がされる授業、演習に参加し、グループの学生達にアドバイスすればいいと、思っていた部分があったかもしれない。

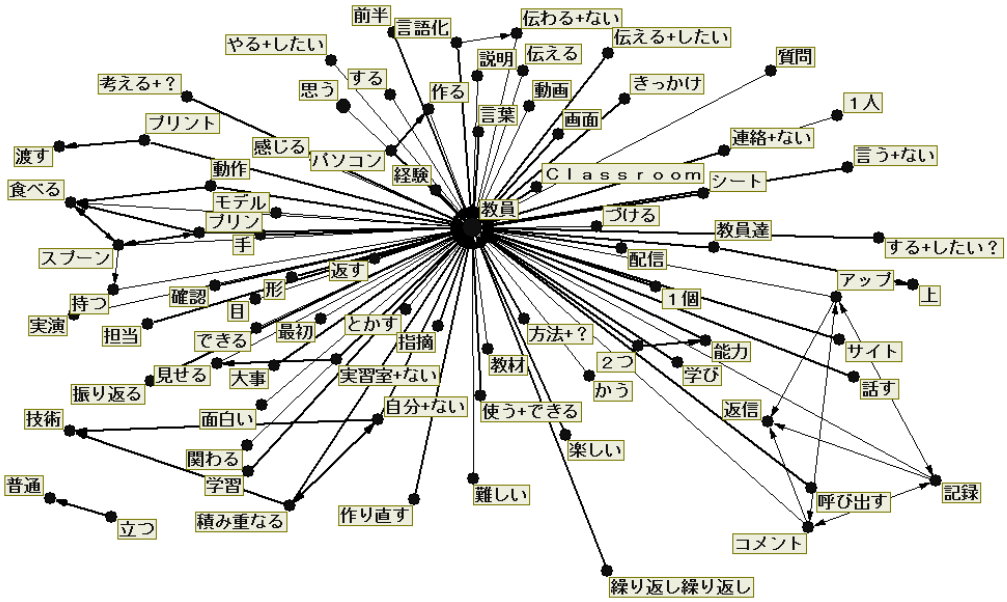

図 4　注目語「教員」ことばネットワーク

③「教員」を中心とした注目分析（図4,表8）

「教員」を中心とした注目分析のことばネットワークは図4のようであった。この注目語の共起抽出の結果を表8に示す。

「教員」に結論づく《前提単語》では、遠隔授業では教員の身振り、手振り、デモンストレーションが少なくなり、限られた時間での録画や資料、テキストという言語による教育となり、【言う+ない】【言語化】カテゴリの原文に、改めて教員自身の言語化能力と向き合う経験をもたらしたことが示唆されている。これまで経験してきた看護用具を見せながら対面で講義、演習と異なる遠隔授業では、制限された動画、話し言葉、文字資料が中心となることでどの場面で何をどのように言語化するかの迷いが生じていたことがわかる。『教員は、外せない部分は授業でしっかりと話すが、学生たちが自分たちでやってきたことを使いながら自分で考えられるところはあえて言わずにしていた。そうしたものが、今年に限ってはちょっと、自分の頭で考えるというところが難しい。』と感じ、『すごく教員である自分自身に意識化させられる』体験が表されていた。

遠隔教育の重要な教材である動画をオリジナルに作成した経験は【画面】のカテゴリから読み取ることができる。『足を少し前に出して椅子の人は立ってみてとか、畳の人も手をつかないで立ってみてとか、を教員が画面を見ながらやった。』や『プリンを画面に出し、じゃあそれを食べますよ、どういう動きをしますか、口を閉じないと無理ですよね、そんな話をしながら教員がやって見せた。』というように、どの場面をどのように見せたら学生の理解を助けるかを考えていた。また、『画面の中でモデル人形を見せたり、実際の器具を見せたりをした。』と動画であっても実物が見れる工夫をしていた。

表8　注目語「教員」に結論付けられる前提単語の原文抽出

【カテゴリ】	前提単語	原文要約
【形】	かたち/形	学生たちに離れてと言っても、離れないでくっついて、順番待ってたりとかの際には適宜指導を入れるようなかたちがいつもの年よりも多いと思う。 グループに教員の担当をつけて援助計画を立てたりとか修正したりっていう、今年はそういう形でやったりした。 いつもだと技術チェック不合格だった学生を補講とかいう形で受かるようになるまで教員がずっと見る。 教員から学生に、ちょっと楽しいような動画の見方、そういうふうなのを先にして臨むと授業分かりやすいよとかって形で言った。 学生の技術の到達について、部分部分では多分押さえられているが、全員無菌操作はできるね、じゃ、次いくよ、という形にはいかなかった。 授業において、教員は、一番伝えたいことをどんな形で学生に伝えていくかっていう。 教員として初めての遠隔授業だったので、音声を入れる不安もあったし、吹き出しの形で無声で、話す言葉が文字になっていろ
【画面】	画面	教員は、実演してみるっていうことも画面の中でやってみる、別に動画を撮ってClassroomに上げたりっていうこともして補うようなことはした。 足を少し前に出して椅子の人は立ってみてとか、畳の人も手をつかないで立ってみてとか、を教員が画面を見ながらやった。 プリンを画面に出し、じゃあそれを食べますよ、どういう動きをしますか、口を閉じないと無理ですよね、そんな話をしながら教員がやって見せた。 技術論の授業なので実演したりというところがとても大事になるので、教員は、この画面の中でモデル人形を見せたりとか実際の器具を見せたりをした。
【手】	手/手洗い/手順/手つき/手技/手元	学生には、毎月1回、他の領域もまとめて資料等をレターパックに詰め込んで郵送していたので、学生は手元に資料がある。 学生には、やっぱり技術なんかは講義でした内容だけではなく、手順とか本来は自分たちで書いてもらわなくちゃいけない。教員は、その手順を学生達が実際に見てできるように、今年はプリントにして渡した。 これまで授業で教員が発問しても学生からは手挙げなく、考えてるのか考えてないのか分からないと思ってた部分は、考えてくれてたんだ、ただ、手を挙げるにはちょっとハードルが上がってたんだと気づけた。 学生も他のオンデマンドになると課題が凄く多くなってしまって大変だって言っているところで、今まですごく考えさせられた部分を、教員で手を貸してるっていうところはある。 教員が、それこそ、手をつかんで、この持ち方違うよ、とか、腕広げないとエリア確保できないよ、とかいうのを、繰り返し繰り返して、身に付けたりとか体の動かし方というのを見る。 教員は、その手順、パソコンの使い方の手順をビデオを録ったり、あとは手順書を作ったりして、Manabaを通して配信したりを最初の頃やっていた。 学生は、手順は本当にもう覚えていたので支障は、授業が前になった支障っていうのが、ビデオを見てれば起きなかった。手元がアップできると学生がこれ見たらいいんだって思う。 実習室では事前に手洗いをするのも手洗いが密になるので手洗いをせずにアルコール消毒をする、それで基本はいいのだが、実習室に入ったら手洗いをするという習慣が全然身についていないなど、そこら辺の削ぎ落としてしまう部分を、教育としてどうフォローしていくかってところは課題である。 吸引の演習とかやっていくと、そこは愛護的に、鼻腔から入れていくとかがわかるのだが、学生はそういう手つきにならないというか、ガッと入れてしまう。学生は、痛いということも経験もしていないから分からない、というような状況で、手技が荒いというか、優しさがない感じにはなってしまった。
【能力】	能力	教員（私）は、学生の能力には、理解する能力というのと、不器用さ、器用さという2つあるとの思っている。 2つの能力において、学生の習得に差が付いたというところがちょっと例年と違う状況になってしまったかな、というふうに教員（私）は思う。 オンライン中心になったりとか、実際の人を触れないとか、実際の人を診れないとかというふうになると、教員として、その辺の教員の能力というか自分の察知能力というか、そこがなんか難しいな、というのを感じる。
【学び】	学び/学ぶこと	知識の授業終わるとその次の日とか次の翌週に演習を入れるっていうふうな、今までの授業スタイルの方が学生は学びがしっかりできてるかなっていうふうに教員としては考えた。 学生の学びがかなり変わってしまっていたことについて、もう少し何か良い方法がないかな、というのは教員としてはずっと悩んでいる。 Zoomの授業も面白かったけれども、対面での授業のあの姿を見るとやはりみんなで学ぶことは意味があると思っている。学生達はみんなで学ぶということのかけがえのなさみたいなものはとても感じている。教員もみんなで学ぶということのかけがえのなさみたいなものを感じられることがエネルギーになる。
【言う＋ない】	言う＋ない	教員は、今までの授業だとその思考の部分を残しつつ、あえて言わない部分があった。教員は、外せない部分は授業でしっかりと話すが、学生たちが自分たちでやってきたことを使いながら自分で考えられるところはあえて言わずにしていた。そうしたものが、今年に限ってはちょっと、自分の頭で考えるというところが難しい。 Zoomのブレイクアウトルーム機能を使い学生達がグループワークをやっているところに、教員達に入って指導してねと言うと、その教員達は上の教員の目の届かないところで自分で自立して教育活動をしないといけない。 教員側とすればいい、これ、って言う人もいる、行かなくてもこれで目標達成できてるじゃない、この方法で今度からいきましょうって言う人も中にはいて、それがうまく行ってない。 学生は、技術は大変だけど楽しいと言いながら一生懸命やってる姿があったので、それはもう対面授業にして、教員が感染予防に注意して、そこは良かったかなって思う。 遠隔授業オンタイムで学生に技術の仕方が違うといくら言っても、なかなか直せないし、直した後の確認までは教員は個別にできない。
【言語化】	言語化	ここを言語化しなきゃいけないんだ、という部分が、すごく教員である自分自身に意識化させられるというか、伝わっていないということは分かる、というのは分かった。 学生に伝わっていなかったからには、言語化しなきゃいけないけど、教員には、どう言語化したらいいのか、という言語化の難しさがある。 教員としては、言語化するときに、学生にイメージしやすいものはああインフルエンザかな、と思った。
【大事】	大事	教員は、学生の反応から、演習って大事だなって思った。 技術論の授業なので実演したりがとても大事になるので、教員は、画面の中でモデル人形を見せたり、実際の器具を見せたりをした。 技術だけではなく講義としても、ほんとに大事なこと伝えたいことを学生達に伝えるために、教員はどういった授業の構成で設計といったらいいんでしょう。
【伝える＋したい】	お伝えする/伝える+したい	1回目の授業では、学生には、人間の元々の動きをまずは知ること、理解することが重要なんだよということをお伝えする。 教員が学生に言葉で伝えたときに、相手の学生がイメージしているものというものが、教員の伝えたいものとまた違ったりする難しさがある。 技術だけではなく講義としても、ほんとに大事なこと伝えたいことを学生達に伝えるために、教員はどういった授業の構成で設計といったらいいんでしょう。
【1個】	1個	消耗品が比較的潤沢だったので、教員は、どうやって練習するよとかいう動画も1個ずつ作って、オンタイムでその手技を確認しながらとか、説明をもう1回加えながらとか、やることがができた。 遠隔授業での学生の技術の到達は、全てがあやふやなままというか、1個ずつ積みあがっていったという感じが教員（私）にはちょっと感じられなかった。

こうした課題に取り組みつつ、『繰り返し繰り返して、身に付けたりとか体の動かし方というのを見る。』【手】ことの大事さや、『知識の授業終わるとその次の日とか次の翌週に演習を入れる』とういう『今までの授業スタイル』【学び】が学生の学びを支えていること、『教員もみんなで学ぶということのかけがえのなさみたいなものを感じられることがエネルギーになる。』【学び】ということが改めて認識されていた。

制約の大きな初めての遠隔授業に取り組んだことで、遠隔授業、対面教育の差を超えて、『授業で教員が発問しても学生からは手挙げなく、考えてるのか考えてないのか分からないと思ってた（が）、考えてくれてたんだ、ただ、手を挙げるにはちょっとハードルが上がってたんだ』【手】『教員が学生に言葉で伝えたときに、相手の学生がイメージしているものというものが、教員の伝えたいものとまた違ったりする難しさがある。』【伝える＋したい】という学生の状態をどのように理解するかを考えていたことが表現されていた。

教員として、『一番伝えたいことをどんな形で学生に伝えていくか』【形】、『技術だけではなく講義としても、ほんとに大事なこと伝えたいことを学生達に伝えるために、教員はどういった授業の構成で設計』【大事】【伝える＋したい】したらよいかという自らへの問いが表現されていた。

6.考察

1）看護系大学における遠隔教育環境の差異によって生じた遠隔教育の内容

遠隔教育を可能にするのは、授業を発信する側のIT環境と授業を受ける学生側のIT環境の整備が前提条件であり、対面での教育と遜色なく即時的な双方向性を担保することが求められる。

2020年4月に新型コロナウィルス感染拡大による緊急事態宣言が発令され、入学直後に教育が開始されることの多い基礎看護学領域で、遠隔教育が開始された当時の遠隔教育に係るIT環境は、未整備の大学がほとんどであった。

令和2年度開講以前に、大学としての遠隔教育体制（遠隔教育用スタジオ内に複数のサポーターが常駐等）が敷かれた例が1件見られ、際立った早期対応と言える。また、教員のPC用カメラ、マイクなどの予算を確保し、令和2年8月には大規模工事が行われた事例が1件あり、かつこうした大学全体を動かしていたのは基礎看護学領域の教員であったことは特筆に値する。

一方、双方性教育ツールの利用禁止や特別なサポートシステムがなく、他大学の無料研修の受講などの自助努力やITリテラシーの高い教員の支援など、組織立っていない支援をもとに、手探りしながら遠隔教育を担った対象者もあった。

遠隔教育の中で、学生の学習意欲につながったとみられるのは、項目を絞った演習や遠隔的であっても、ブレイクアウトルーム機能を利用したグループディスカッションができたり、教員への質問とそのフィードバックという形での双方向性の教育ツールの利用であったと考えられる。

令和2年度前期において、即時的双方向性を担保した遠隔教育の実施ができたか、授業の資料、演習に必要な衛生材料を遠隔教育開始前に送付できたか、出版社等の一時的無料教材提供サービスを大学として契約できたか、という大学が主体となっての組織的な対応が前提である。また、オンデマンド、オンタイ

ム等の授業を発信する環境、学生のデータ受信のためのFD研修、情報センター等の常時サポートが得られる体制の整備が遠隔教育の質の担保の要であると考えられる。

2）基礎看護学領域教員の遠隔教育体験の意味

以後の文中、《　》は《前提単語》を、【　】は《前提単語》の類似表現からカテゴリを、《前提単語》の原文の要約の一部引用は『　』で示した。（　）内には、「注目語」とその注目語に共起している《前提語》から得られた【カテゴリ】を示した。

（1）技術教育の困難感と工夫

手や動作、関係性を同時に学ぶ実習室での技術演習につながる教育が必要な基礎看護技術教育を遠隔教育として行った体験は、困難とそれを乗り越える工夫を生み出していた。

授業資料、衛生材料を授業に先立って、あるいはひと月ごとにまとめて送り、特に見せたいポイントを検討して教員が【画面】（「教員」）を製作してあらかじめ見るように指示することで『支障なく』対面の演習につなげた事例が見られた。一方、『一つ懸念することは、学生の遠隔授業用に工夫して作成したビデオを見ながら動けるが、ビデオをあまり作りすぎてしまうと今度は逆に学生が考えなくなってしまう。遠隔授業用に事前学習や作成されたビデオを繰り返し見るということをやることで、目標は一見達成できるけれども、学生が自分で考える力がなくなってしまうんじゃないか。』（「授業・演習・遠隔授業」【考える+ない】）という気がかりを感じていた。

どういう画面、資料を見せるかという課題は、これまで演習に先立つ教員のデモンストレーションで学生の状況をみながら【伝わる+伝わらない】（「教員」）状況を見とり、一部を繰り返し見せる、説明を追加するという状況に合わせたこれまでの教育方法を転換したことから生じる不自由さや対面教育の有用性を見出していた。

スライドに声や吹き出し文字で説明を加える、または限られた時間の録画の中で説明する内容をあらかじめ原稿を起こし繰り返し読み返すこと、あるいは基礎看護学チームの中で検討を経て言語化（「教員」【言語化】）したことが窺われた。

『ここを言語化しなきゃいけないんだ、という部分が、すごく教員である自分自身に意識化させられるというか、伝わっていないということは分かる、というのは分かった。』（「教員」【言語化】）という語りに見られるように、こうした経験から、対面授業、対面のデモンストレーションのポイントは何かを考えた教育実践につながるものと言える。

（2）遠隔授業を受ける学生の学びの支援と教員の困難

『授業は、学生が受けられる準備ができていれば、それほど問題にならない』（「学生」【受ける】）『自分たちもちゃんとしないと演習もさせてもらえない』（「学生」【受ける】）と自己学習することが必要だと意識（「学生」【づける】）、『演習で教員が学生に指摘するところは少なく、学生も頑張っている』（「授業・演習・遠隔授業」【割く】）姿が垣間見られ、『数少ない演習であったが、学生は演習できてよかったっていう（略）、ほんとはもうちょっとやりたかったという』（「授業・演習・遠隔授業」【感想】）に見られたように、制約のある遠隔教育のなかで学生た

ちは事前準備をして意欲的に取り組んだことがとらえられていた。

しかし、自ら質問をしてこない(「学生」【分かる+ない】)、チェクリストを作成する課題に取り組めない学生のサポートが十分できない(「授業・演習・遠隔授業」【チェック】)もどかしさを抱え、『いつもだと技術チェックして不合格だった学生』への『できるようになるまで』行っていたようなフォローはできず(「授業・演習・遠隔授業」【チェック】)、『無菌操作をやって、チェックやテストをして、その課題がクリアした上で導尿を重ねていく(略)その積み重ねができなかった。』(「授業・演習・遠隔授業」【チェック】)と、学生が遠隔授業でどれだけ技術を習得したかに不安が残されていた。

『学生は、演習で看護師らしいことをやる喜びはあった』(「学生」【ある】)と感じられ、『技術は大変だけど楽しいといいながら、一所懸命にやっている姿があったので、それはもう対面授業にして、教員が感染予防に注意』(「教員」【言う+ない】)してやることは大切だと確認されていた。

『演習を短く、洗練させたものだけに絞って、やるべきものに時間を割く』(「授業・演習・遠隔授業」【割く】)ために教育内容が模索されていた。感染予防に注意して対面での演習を行うには『少人数であればあるほど教育効果あるといえども、やっぱり教員の負荷と学生の到達というところのせめぎあい』(「学生」【ある】)となり、同じ演習を4回、5回と連続して一日中演習している状況が生まれ、『教員の疲弊する状況』(「学生」【ある】)が起こっていたことは紛れもない事実と言える。

(3)遠隔教育への教育方法の転換により得られた教育への「問い」

令和2年度前期に基礎看護学領域の教員は、IT環境が整わない中、急遽開始された遠隔教育に取り組み、学生の学びを担保することを目指して、さまざまな困難を乗り越え、授業内容を検討し工夫を凝らして授業・演習の取り組む経験から、自らの教育のありかた、基礎看護学における技術教育のありかたについて意義ある発見と、今後の教育につながる「問い」をみいだしていたと捉えられる。

看護学の学習の入口にある1年生・2年生に、健康障害のある患者の状態と、どのように日常生活の支援をするのかが理解できるように言語化することの難しさや、何に焦点をあて、どう言語化するかという教員自身の自己点検や課題意識が得られたことが示唆された。

遠隔授業の中で、チャット機能を使った学生の発言の様子から、対面授業で発問に答えるのはハードルが高いが、学生は考えているという学生の見かたが転換し、制約の中での対面授業での体験から『教員もみんなで学ぶということのかけがえのなさみたいなものを感じられることがエネルギーになる。』(「教員」【学び】)という学生同士、教員と学生がその場に立ち会う対面での教育方法の重要性を確認していた。

『教員が学生に言葉で伝えたときに、相手の学生がイメージしているものというものが、教員の伝えたいものとまた違ったりする難しさがある。』(「教員」【伝える＋したい】)ということを前提に、『技術だけではなく講義としても、ほんとに大事なこと伝えたいことを学生達に伝えるために、教員はどういった授業の構成で設計と言ったらいいんでしょう。』(「教員」【大事】【伝える＋したい】)と教育を担う自らへの問いが生まれていたと考えられる。

7.結語

1）2020年4月に新型コロナウィルス感染緊急事態宣言下で得た遠隔授業の教育体験から『学生目線』の講義、演習運営の授業展開に向けた手ごたえ、今後に向けた課題を見出していたことが示唆された。

2）実際に物品に触れ、繰り返し操作の練習を行う演習は、学生の学習意欲の維持することにつながっていたが、教員の疲弊を伴っていた。

3）入学直後に教育が開始されることの多い基礎看護学領域の教育では、入学当初から情報発信システム、学生の受信システム、双方向性を担保した遠隔授業ができるIT環境の整備が前提条件となることが確認された。

8.研究の限界と今後の展望

本研究は17大学に所属する経験年数の異なる基礎看護学教員17名の調査をもとにしたものであり、各所属大学のIT環境の差異、教育経験の差異による比較を行っていないことから結果の一般化には限界を有する。

今後、大学側、学生側のIT環境が整い、基礎看護学領域での遠隔教育の経験を積み重ねられた段階で再調査を行い、今回の遠隔教育の経験が教育内容の精選や教育方法の選択に与えた影響や遠隔教育と対面教育のハイブリッド型教育方法の開発などさらに多様な教育方法の事例を集積することが課題である。

利益相反：本研究に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はない。

謝辞：本研究にご協力をいただいた大学施設責任者、研究対象者の方々の新型コロナ感染拡大緊急事態宣言下における看護基礎教育の取り組みに敬意を表し、貴重な体験を提供いただいたことに感謝申しあげます。

付記：本研究は、令和2年度湘南鎌倉医療大学共同研究費の助成（承認番号005）を受けて実施したものである。また、本研究結果の一部は、令和3年第41回日本看護学会学術集会で発表した[11]。

9. 文献

1）平成 13 年文部科学省告示第 51 号（大学設置基準第二十五条第二項の規定に基づく大学が履修させることができる授業等について定める件）
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103/002.htm 2021.11.24 閲覧

2）文部科学省　令和 2 年 4 月 24 日「新型コロナウィルス感染症対策に関する大学等の対応状況」
https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf 2021.11.24 閲覧

3）看護系大学協議会　令和 2 年 4 月 9 日「新型コロナウィルスの感染拡大にかかる看護系大学への影響および対応に関する調査結果　第 2 弾 https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/04/coronavirus-cyousakekka2nd.pdf 2021.11.24 閲覧

4）中野　正孝，中村　洋一　他：わが国の看護情報科学教育の現状と課題　IT　教育に関する全国調査，三重看護学誌(1344-6983)7 巻 Page149-158,2005.03

5）文部科学省　令和3年11月19日「大学等における令和3年度後期の授業の実施方針等に関する調査及び学生への　支援状況・学生の修学状況等に関する調査の結果について」

https://www.mext.go.jp/content/20211119-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf 2021.11.24 閲覧
6)服部兼敏. テキストマイニングで広がる看護の世界 Text Mining Studioを使いこなす, ナカニシヤ出版, 京都, p2-196, 2010
7)前掲書6), p93
8)前掲書6), p102
9)前掲書6), p166
10)前掲書6), p124
11)屋宜譜美子, 蔵谷範子.看護系大学基礎看護学領域で遠隔授業に取り組んだ教員の経験, 第41回日本看護科学学会学術集会プログラム集(WEB開催 12/4-5), 2021.11.19-12.28オンデマンド配信